

2018年1月28日

福音書からのメッセージ

人々はその教えに非常に驚いた。律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになったからである。

(マルコによる福音書1章22節)

当時ユダヤ人は、安息日ごとに会堂に集まって礼拝をしていました。ある安息日のことです。イエス様が会堂に入り、教え始めました。それを聞いた人々は、非常に驚いたと聖書は伝えます。彼らはイエス様が、律法学者のようにではなく教えられたことに驚きを見せます。

律法学者はいつも、過去の議論や聖書の言葉などを引き合いに出して、教えを伝えていました。そして会堂に集まる人々は、それを毎週のように聞いていたのです。安息日に会堂でおこなわれるのは、いつもと同じ祈りであり、いつもどおりの信仰告白であり、いつもと変わらない説教でした。

わたしたちにとって毎週の礼拝も、同じようなものになっていないでしょうか。目新しさなど求めずに、淡々と決められた言葉を唱える。朝ごはんはいつも決まったものを食べるように、変化を求めない。それはそれで、一つの大事な礼拝のあり方だと思えます。

しかしその日常の中に、イエス様が来られました。会堂で教えるイエス様の姿に、人々は非常に驚きました。非常に驚くと書いてありますが、「ひっくり返るほど驚く」という意味を持つ言葉です。考えられないことが、目の前におこったのです。

いつも和食の朝ごはんなのに、突然洋食が出てきた。確かに驚くかもしれませんが、ひっくり返るとまではいかないでしょう。ではイエス様のどのような姿に、人々はひっくり返ってしまったのでしょうか。

キーワードは、「権威ある者として」です。この権威は、神さまから与えられたも



のです。イエス様は人々に、神さまの思いを直接示したのです。今日のこの場面、神さまの思いがわかる出来事がありました。

会堂に一人の男が座っていま

した。彼は汚れた(けがれた)霊に取りつかれていました。「汚れ」という言葉には、特別な意味がありました。ユダヤ教では、いろいろなものを「清い」、「汚れている」と分けていました。人についても、こういう時には汚れているとか、こういうものに触ると汚れると考えていきます。

だから汚れた霊に取りつかれた男には、だれも手を差し伸べようとはしませんでした。自分が「清い」と思い込んでいる人々は、そのような人には関わらないのです。

しかしイエス様は違いました。汚れた霊はイエス様が何者なのかを知っていました。「かまわないでくれ」。その汚れた霊の叫びは、イエス様が汚れた霊に取りつかれた男に手を差し伸べようとされたことを示します。イエス様は、そのような人をも優しく包み込むために来られました。それが神さまの思いであり、愛なのです。

そしてそれこそが、イエス様の権威ある新しい教えです。イエス様との出会いこそが、わたしたちに対する教えなのです。

桃山基督教会

〒612-8039

京都市伏見区御香宮門前町184

TEL/Fax 075-611-2790

メール momoyama.kyoto@nssk.org

<教会ホームページ>

<http://momoyama.hannari.com/>